

覚書

満州佐伯村におぼえ書

会員 矢野徳弥

（南海部郷土佐伯村志字津之）

一、はじめに

いまから三十年も前のことになる。太平洋戦争の始まった昭和十六年二月から、やがて敗戦を迎える昭和二十年八月まで、中国東北部、遼河の中流域の一角に、佐伯地方出身者を中核とする農業移民の村、いわゆる『満州佐伯村』の建設が進められていた。

それは、明治以来、近代国家として急激な成長を遂げたわが国の、大陸経営の一翼をなう、国策移民の一つとしてであった。

しかし、これに参加したすべての人達が、すべてが国策順意を意識していたとは思われない。むしろ私的交情、たとえば耕すにも土地がなく、勤くにも適当な職の得られない、貧しい村の生活から脱出し、広々とした新天地で、思いきり第二の人生を出發したい——とする、強い願望に支えられた一団でもあったのである。



佐伯村の建設は非常に順調に進んでいた。入植以来四年の歳月が経過し、教育施設、産業施設

も整備され、それに何より豊作がつづいたため、早く入植した人達の生活はかなり豊かとなり、後続の人達も、食糧の不自由は全くなかった。（当時、日本内地の食糧事情は非常に悪化していた）

開拓団の第一期の建設計画は一応五年で、この期を過ぎれば、全員自立農家となり、開拓団を解いて、自治制をしき、いわゆる『何々村』が生まれることとなっていた。

佐伯開拓団は、他に先がけて、団員農家の自立（個人経営化）を進めていたため、村に移行できる条件は、早くから整いつつあった。人々は、理想郷『佐伯村』の實現を目前にして、希望に大きく胸をふくらませていた。

その夢が二十年八月の敗戦により、一夜にして無惨に破られ、やがて暴民土匪が襲撃、中国官憲の迫害、食糧の欠乏という困難な状況の中で、その地を追われ、多数の生命の犠牲を払いつつ、一年後の昭和二十一年九月、かろうじて故郷にたどりつき、ここに『満州佐伯村』であったという。

その年（昭和二十年）の五月、満州（現在の中国東北部）以下満州と書くには、義勇隊を含め、大小八百八十一団約三十三万二千人が入植していたが、戦況の窮迫と共に青年男子はことごとく軍隊に召集され、八月の初めには内地から食糧増産のため派遣されていた報国農場隊員を含め、約二十七万人が開拓地にあって、戦死・自決約一万一千人、病没約六万七千人、消息不明約一万一千人、残留約一千人と、その三分の一近くが犠牲になったので

あった。

佐伯開拓団の場合、敗戦当時百五十二戸、五百七十一名が現地にあったが、一年後、故郷の土を踏んだのは四百九十二名で、七十九名の入達が不幸な犠牲者となった。

二、分村計画の始まり

満州に佐伯村を建設しようとする計画が、最初に誰によって持出され、どのような経過をたどって決定されていったかは、ぜひ知りたいところであるが、いまのところ資料が不十分で、はっきりしない。

ここで、分村移民という方策が打ち出されてきた背景を知るため、満州移民の歴史に概略ふれてみたい。

満州（中国東北部）に、農業移民を入れたいという計画は早くからあったが、実現したのは日本の傀儡国家、満州国が作られた昭和七年の、第一次滿蒙開拓団が始まりで、その後毎年、送出さづけられたが、昭和十一年までに九二四、世帯数にして二千七百八十五戸が入植したに過ぎなかった。

これでは、満州国の支配強化に役立たずと判断した関東軍の要請で、昭和十一年八月、広田内閣の手で、満州農業移民百万戸計画なるものが、国策として樹立された。昭和十二年と初年度として、毎年五千戸、二十年間に百万戸、五百万の農業移民を送りこむというのである。

この計画の第一年度の目標は、ほぼ達成できたが、第二年度の計画遂行には、かなりの困難を伴った。この頃から府県の名称を付した開拓団が生まれるようになったのは、国が国策として、府県毎に、目標を指示、強制したからである。

大分県からも、第七、大分村開拓団が編成され、現在の中国、黒龍省（当時はその一區画の瀋江省）珠河県（

日本の郡に相当）元宝鎮（日本の町に相当）地及び送りこまれた。この第七次の中には、異色の開拓団があった。村の半分をそっくり分けて、満州に集団移民し、同名の姉妹村をつくるという、長野県大田原村の試みである。幸いこの計画は成功し、建設がきわめて順調にいった。

折から、前年から使じまった支那事変が、初期の予想に反し、長期化の稼相を示しはじめ、農村の壮年男子の多くが戦争に動員されたため、府県段階での広域的な移民団編成は、行きつまりの状況がでていた。

そこに、大日向村の分村移民という、新しい形式が登場し、その成績が好調ということになると、政府の方針が一転して、分村移民の推進に変わった。これも不思議でない。国内の既存の村を分割する方式であれば、開拓団の編成は、限りなく可能である。昭和十四年の後半に入ると、大分県でも、この要請に答える動きがいくつか出てきた。その一つは、東国東郡中武蔵村、他の一つは日田郡大鶴村、そしていま一つは、南海部郡西部七か村がブロック、それであった。

昭和に入ってから、全国的に農村の窮乏はひどく、佐伯地方もその例外ではなかった。どの村もその救済に、懸命の努力を拂っていた。農村経済更生運動を起し、村民の負債整理も、ただ一つの特産である木炭の共販推進、里道の整備、未利用地の開墾などに全力を注いでいた。しかし、耕地が狭く、生産力の低い山里に、人間の多すぎることもまた、心配の種であった。

この頃、先進開拓団の成功も伝えられ、指導者の間に、村の人口を、いれ農家そのものを開引く必要を、真剣に考えはじめた人もあった。

そこに、国策として移民送出の圧力が日に日に加わり、

分村はいずれもすべての村に強制的に下されてくるものと受取れる空気が出ていた。もし、そうであるなら、早い時期に、有力な条件を得て行ない、大分県の今後の分村の範にならう」という判断も動いた。

しかし、どの村も一村では小さすぎ、単独の分村は困難であった。そこで考えられたのが、数か村の連合による、ブロック分村である。昭和十四年も暮れ近くになつて、河回となく会合がもたれ、討議が重ねられた。

その時の関係者は、高橋孫十郎(因庭村長)、矢野武吉(中野村長)、平井真寿美(川原木村長)、下岡伝作(直見村長)、又見徳藏(切畑村長)、工藤嘉吉(上野村長)、御手洗勝(明碧村長)、平岡京佑(上野海部郡農会長)、重田三郎(県経済吏生課)、忠藤新(県教務課)などの人々であった。

年が明けて昭和十五年一月、七か村ブロックの分村計画が正式に決定した。

昭和十六年を初年次として、五年間に、二百戸を送り出し、新しい開拓村の名称を「佐伯村」と呼ぶことに意見が一致した。入植先は未定であった。

このとき、村別送出計画をみると、関係した村の中でも、その計画に対する熱意の差が、うかがえて、興味深いものがある。

中野村	五〇戸	上野村	三〇戸
明治村	二〇戸	切畑村	二〇戸
直見村	二〇戸	川原木村	四〇戸
因庭村	二〇戸		

といつた数であった。(つづく)

敬平

足田 敷氏(会員)佐伯市下堅田(西野)
去る七月十六日深夜、南海旅院入院、加藤初なく十七日朝急逝、六十八歳、十八日午後二時葬儀あり、本会より電賀(岩田 羽柴会葬)

特志御寄付拝受

- 金五子田 辰かき。〇故 佐伯市城南五ノ河野三枝氏 生天河野興一氏の請願書におおたり、生前の文類と葬儀に際しての遺志を頂いた、その謝意を表して寄贈下さつた、故人を徳に感謝下さい。六月廿二日拜受。

金老万目也

佐伯市藤原五ノ高木嘉士口氏 故夫人の年中お見舞、葬儀の際に、厚志に對し感謝と、六月廿九日高木陰志と、史談会に寄附下さつた、感謝。

圖書資料寄贈拝受

○覚元書:佐伯文庫

- 1 佐伯文庫の創設者北利高橋辰一 豊原新文庫(の寄贈本)
- 2 右三冊 佐伯市 著者梅本幸吉氏 (元佐伯中教諭 現別冊文庫)

○大増字節用集(古書)

南海郡郡直川村 普宮衛吉氏 (格門修築 棟梁)

○研究紀要(宮崎県総合博物館)

離島調査報告所(同館) 島野浦の歴史と民俗 付:大分県築島、屋形島 宮崎県総合博物館 沢武人氏

○大分県地方史 第七七号

大分県地方史研究会 大分県史料(77) 続キリシタン史料(1) 大分市鶴崎葛水 神教公園 室部光五郎下氏

○白井史談 第六十六号

- 柳史研究の調査と方法(古書)
- 熱田神宮史料考(古書)
- 福岡市 佐脇貫一氏
- 以上感謝して拜受しました。 会員皆さんの活用を希望します。

賛助御寄付拝受

- 金二〇〇〇円 貝原啓三氏(七分)
 - 金二〇〇〇円 和泉邦一氏(東京)
 - 金二〇〇〇円 山名常明氏(西宮)
 - 金二〇〇〇円 水田 長氏(大阪)
 - 金二〇〇〇円 三重野政男氏(佐伯)
 - 金一〇〇〇円 五十川新次郎氏(鶴岡)
 - 金二〇〇〇円 吉長宗之進氏(佐伯)
 - 金二〇〇〇円 櫻井 幸氏(直川)
 - 金三〇〇〇円 古川正彦氏(鶴見)
 - 金一〇〇〇円 神崎辰雄氏(同)
 - 金二〇〇〇円 小野 茂氏(北川)
 - 金五〇〇〇円 佐藤一男氏(壽)
- (以上五〇、七、二二まで)

叙勲の栄光

鶴見新羽出浦 安部弥古衛門氏 多年郵政事務に盡瘁のかたじけなく、勲六等瑞宝章を授けられた。満八十八歳。この栄光を、心からお花びら申しましよ。